

## 第三章 災害の記録

人類が地球上に生息する限り、天変地異は原始の昔から避けることのできない自然現象であった。近代科学の発達によってある程度予知、予防の手だてはできてきたとはいえ、他面文明は自然の順行を破壊する傾向があり、天災に加わる人災もまたその速度を増してきつつある。原始社会といい、文明社会といってもしよせん人間の営みは大自然の前には極めて劣弱である。「天災は忘れたころにやってくる」という寺田寅彦の言葉は未来永遠の人類に対する警鐘といふべきであろう。

さて、わが小豆島の災害の第一位は暴風雨、洪水であり、第二位は全国的にも降雨量の少ない島のこととて干魃であった。一方で絶えず田畑の灌漑や生活用水の減少に苦悩する反面、大時化による大水の被害をうけるという皮肉な運命にあるのがこの島である。

古代、中世のことは全く不明であるが、以下近世以降の主なる災害について記録しておく。

近世の主な災害

一、正保元年（一六四四）

八月一日夜十二時ごろから降雨、二日夜六時まで続いて全島大洪水

一、慶安四年（一六五一）

全島旱魃、加子浦であったため、夫食米、種米として大坂の御蔵から米千石給付

一、承応三年（一六五四）島中飢饉

一、寛文五十六年（一六六五—六六）

二年続きの旱魃で飢餓人多く大坂御蔵から拝借米

一、延宝二年（一六七四）

洪水 島内各村の池、塩浜の樋などが決壊

一、延宝三年（一六七五）

島内飢人総数二、一九五人 大坂船奉行より夫食米拝借 男は一人一日三合、女は二合、高持百姓は三〇

日分、無高百姓は二〇日分

一、延宝八年（一六八〇）

秋大洪水 当村の奥之坊池、室生の新池、二面の本谷池、古池、入部の塩浜の堤決壊

一、延宝九年（天和元年一六八一）

二月 島中飢饉 代官から拝借米

一、貞享四年（一六八七）

大雨のため島内の池の多くが決壊

一、宝永四年（一七〇七）

八月 大風雨高潮のため当村の塩浜の堤が破損した。十月には南海、東海地方の大地震、大坂では大津波が起こった。十一月には富士山が噴火

一、享保三十五年（一七二八—二〇）

- 島内連年の旱魃 享保六年に大洪水
- 一、享保十四年（一七二九）  
大風波 当村でも田地に海水が入り、収穫高一〇石八斗余が田の年貢から除外された。
- 一、享保十五年（一七三〇）  
八月 大風雨 池田、蒲生、二面、吉野、蒲野各村の田畑、塩浜、池などに土砂が大量に流入した。
- 一、享保十七年（一七三二）  
中国、四国、九州に蝗害こうがいが広がり、この島も同様で九月、飢人調査役人が島内巡視 高松藩から全島合わ  
せて六三四石余の夫食米を拝借
- 一、享保十八年（一七三三）  
旱魃 当村の畑方年貢が引き下げられた。
- 一、元文元年（一七三六）  
洪水で二面の塩浜堤破損、蒲生川、二面谷川、吉野谷川、蒲野しほもち川等の堤が決壊
- 一、宝暦十二年（一七六二）  
八月 大雨洪水 当村では塩浜、川除、溜池に土砂が流入
- 一、明和二年（一七六五）  
八月 大雨洪水 当村では田地四町五反余が被害をうけ、塩浜約一町が高潮のため土砂に埋まった。
- 一、明和八年（一七七二）  
六月 島内旱魃

- 一、天明元年（一七八二）  
大雨で蛙子池決壊
- 一、寛政二年（一七九〇）  
島内旱魃
- 一、寛政四年（一七九二）  
暴風
- 一、寛政九年（一七九七）  
島内旱魃
- 一、文化三年（一八〇六）  
島内旱魃
- 一、文化六年（一八二二）  
島内旱魃
- 一、天保五年（一八三四）  
暴風による田畑被害大
- 一、天保七年（一八三六）  
いわゆる天保の飢饉で、全国的な天候異変は小豆島もまた例外ではなく、四月から八月にかけて雨天続き  
で田方は大損害をうけた。
- 一、天保十年（一八三九）

## 第6編 治 安

津山藩の役人が西部六か村の荒地調査のため来島した。七、八年に続く田畑の損壊を検分したのであろうか。

一、弘化四年（一八四七）

七月 大風雨 当村の被害も大

一、嘉永六年（一八五三）

六月から九月にかけて大旱魃「丑年の旱魃」といった。

一、安政元年（一八五四）

十一月 諸国に地震が起こり、この島でも四日間震動が続き、竹藪<sup>たけくさ</sup>などへ避難したという。翌二年十月には江戸で大地震が起こり倒壊家屋数万戸、市中の大半が火災を起こした。これらを「安政の大地震」という。

一、万延元年（一八六〇）

長雨により不作

一、慶応二年（一八六六）

旱魃と米価騰貴に島中困惑

一、慶応三年（一八六七）

島内旱魃

近世においては、天然痘その他の疫病なども 衛生思想の未発達時代、盛んに流行したであろうことは推察できるが、これについての史料もないのでよくはわからない。近代に入っても、旱魃、暴風雨はやむことはな

かったけれども、なおその上に外国との交通によって、ペスト・コレラなどの新しくも恐ろしい伝染病を移入した。

また、経済事情がよくなると開発の美名のもとに森林を乱伐し、海洋を汚染するなど、自然破壊が行われた結果、近世にはあまりなかった山津波をひき起こしたり、魚族の減少を促進したりした。

一、明治二年（一八六九）

十一月五日 かなり強い地震あり、二、三日小震やまず。被害は特になし。

一、明治四年（一八七二）

五月十八日 大雨 田畑被害

一、明治六年（一八七三）

牛疫島内に流行 八月十八日 上地大火災類焼二二戸

一、明治九年（一八七六）

上地大火 類焼一七戸

一、明治十二年（一八七九）

島内コレラ流行 当村でも死亡九人（八月―九月）

一、明治十三年（一八八〇）

七月二十五日より九月十六日まで五三日間降雨なく島内旱魃 九月十六日大時化<sup>しげ</sup>

一、明治十四年（一八八一）

七月十六日以後六〇日間降雨なく旱魃

- 一、明治十五年（一八八二）
  - 八月五日 暴風雨
- 一、明治十六年（一八八三）
  - 七月二十一日より九月十七日まで五八日間降雨なく旱魃
- 一、明治十七年（一八八四）
  - 八月二十六日 暴風雨
- 一、明治十八年（一八八五）
  - 七月一日 大雨洪水 被害大
- 一、明治十九年（一八八六）
  - 六月十九日より八月二十七日まで七〇日間降雨なく旱魃 八月 室生松井池の内火災 全焼五戸、半焼七戸、九月十日 暴風雨 九月十七日 再び暴風、高潮
- また、コレラ、赤痢等大流行
- 一、明治二十年（一八八七）
  - 赤痢大流行
- 一、明治二十一年（一八八八）
  - 七月二十二日、九月十一日 暴風雨
- 一、明治二十二年（一八八九）
  - 八月十八、十九日、九月十一、十二日 暴風雨

- 一、明治二十三年（一八九〇）
  - 四月十一日より五月十三日まで雨降り続き晴天六日、麦作大被害
  - 七月三日より九月一日まで約六〇日間降雨なく旱魃。九月 コレラ流行。十月六日、暴風雨
- 一、明治二十四年（一八九一）
  - 八月十六日、九月十四日 暴風、海上大時化。十月二十八日 濃尾大地震。県下でも余震があった。
- 一、明治二十五年（一八九二）
  - 七月二十三日 暴風雨
  - 十月十六日 吉野に火災
- 一、明治二十六年（一八九三）
  - 六月二十四日より八月十七日まで旱魃。
  - 八月十五日、全島連合大焚火雨乞いをした。淵崎皇踏山、吉野段山、豊島、四方指、星ヶ城の五か所、十七日によくやく降雨。麦作は十年来の不作。赤痢大流行
- 一、明治二十七年（一八九四）
  - 六月二十四日より七月二十二日まで降雨なし、日射しとくに甚だしく、七月十六日、昨年通り各村連合大焚火雨乞い。赤痢大流行。九月十日 暴風雨 三都村倒壊家屋二戸
- 一、明治二十八年（一八九五）
  - 七月二十四日 暴風雨
- 一、明治二十九年（一八九六）

二月四日 大雪。七月二十一日 五十年來の豪雨。八月十八日 暴風雨 島内倒壊家屋一〇〇戸余に及ぶ。池田村崩壊家屋一七戸、三都村倒壊家屋一二戸。八月三十日 暴風雨。赤痢大流行

一、明治三十年（一八九七）  
八月十三日 県下に赤痢患者が多発したので各都市に検疫委員を置いた。  
稲作に蝗害大

一、明治三十二年（一八九九）  
八月十五日 暴風、海上大時化  
八月二十八日 暴風雨。池田村内全壊家屋三二戸、半壊六戸、破損三五戸、負傷者二名。二生、三都両村も被害大

一、明治三十三年（一九〇〇）  
八月十九日 暴風雨、島内被害大

一、明治三十五年（一九〇二）  
八月九日 県下にコレラ患者発生。草壁港土庄港に船舶検疫事務所が置かれた。六月二十二日初発以來のコレラ患者は八月末現在、県下総数一三一五名。死亡七七二名。島内でも罹病者一〇八名であった。

一、明治三十六年（一九〇三）  
五月四日、十二日 暴風雨。麦不作価格高騰。甘藷安価  
一、明治四十年（一九〇七）  
二月十一日 大雪 積雪一尺以上。

五月十七日、七月十八日 暴風雨 農作物被害大。五月 室生火災 一戸全焼死亡一人

一、明治四十一年（一九〇八）  
五月四日 暴風雨 赤痢大流行  
牛疫流行し本島が最も甚だしく、一四九頭が倒死又は撲殺された。中でも当林地区の被害最大で倒死した牛の霊を七月に祀って「捨頭牛之霊位」という石碑を建てている。

一、明治四十四年（一九一）  
六月十九日 暴風雨 農作物特に桃、りんごの落果が甚だしかった。

八月十五日 暴風雨  
一、大正元年（一九一二）  
四月十九日 空豆大の雹降り、麦作に被害大  
八月二十四日 暴風雨

春から梅雨季にかけて雨量甚だ少なく、農作物の被害大 赤痢流行  
一、大正二年（一九一三）  
七月四日より八月十八日まで降雨なく、日射猛烈。稲作、甘藷に被害大

八月五日 吉野に火災  
一、大正三年（一九一四）

七月十三日より八月二十三日まで降雨なく前年同様日射強く稲作、甘藷共に被害大 赤痢流行  
一、大正四年（一九一五）

八月五日 暴風雨、洪水 中山殿川決壊、橋五個落ち、水車大半流失。弘化以来の洪水という。  
 九月八日 暴風、海上大時化 池田、入部の海岸の損害大  
 一、大正七年（一九一八）

八月二十九日—三十日 県下暴風雨 全島各所の堤防護岸損壊、橋梁落下、家屋倒壊、浸水、田畑流失、船舶の覆没等損害大。特に北浦、淵崎の被害最も多く両村のみで死者八名、負傷者数人を出した。  
 九月十四日 暴風雨

スペイン風邪全国的に大流行し、死者多く島内でも休校する学校が多かった。

一、大正十年（一九二一）

六月十七日 暴風雨

一、大正十二年（一九二三）

九月一日 関東大震災

一、大正十三年（一九二四）

六月初めから八月二十一日まで旱魃 農作物の被害大。九月十二日暴風雨 二十九日暴風雨

一、大正十四年（一九二五）

四月一日 星ヶ城付近より出火 山林六〇ヘクタール焼失

一、大正十五年（昭和元年一九二六）

七月六日 集中豪雨

一、昭和二年（一九二七）

昨年末より本年初めにかけて流行性感冒大流行。三月七日 丹後地方大地震

一、昭和三年（一九二八）

二月十一日 大雪。九月十一日 暴風雨

一、昭和四年（一九二九）

九月 旱魃

一、昭和五年（一九三〇）

一月十一日—十二日 大雪

八月 旱魃

一、昭和六年（一九三一）

二月十日 大雪 積雪約二〇センチ

九月十八日 暴風雨 島内被害大。特に福田村に集中豪雨。山津波が起こり、死者五、重軽傷者一五名、家屋流失一七戸その他被害はもつとも大であった。

一、昭和八年（一九三三）

八月旱魃 農作物は四十年來の不作で、島内稲作の収穫皆無の田地三〇〇町歩に及んだ。

一、昭和九年（一九三四）

五月十三日より八月にかけて降雨ほとんどなく旱魃が続いた。

九月二十一日 室戸台風 島内の家屋、田畑の損傷は大であった。

一、昭和十年（一九三五）

六月二十九日 集中豪雨

七月三日午前一時ごろ、三都村釈迦ヶ鼻沖で大阪商船別府航路みどり丸（一、七二七トン）が、濃霧のため大連汽船貨物船千山丸と衝突して沈没。船客、乗員一六六名中死者七六名をだした。

八月二十八日 暴風雨

九月 麦の条斑病が全島に広がった。

一、昭和十一年（一九三六）

七月 麦の条斑病猖獗しょうぼう

九月十一日 暴風雨 家屋倒壊など被害大

一、昭和十二年（一九三七）

九月十日 暴風雨 島内被害大

一、昭和十三年（一九三八）

九月四日 暴風雨

一、昭和十四年（一九三九）

八月三日 旱魃甚だしく各町村で雨乞い祈願をした。

一、昭和十六年（一九四一）

八月十五日 暴風雨

一、昭和十七年（一九四二）

九月二十日—二十一日 暴風雨

十二月三十一日午前十時五十分ごろ、土庄町小瀬沖にて内海汽船所有にしき丸（四二トン）が沈没し、現役帰休兵を含めて六五名が死亡

一、昭和十八年（一九四三）

九月二十日 暴風雨

一、昭和十九年（一九四四）

七月—八月 旱魃 農作物被害大

一、昭和二十年（一九四五）

二月二十六日 大雪

八月十五日敗戦 今次大戦中の戦災は全国的に前古みぞう未曾有のものであったし、島出身兵士の戦死戦傷等非常の数に達したが、島内の被災は少なかった。しかし戦争末期ともなれば悲惨な事件もしばしば起こった。

七月八日 高松—小豆島間定期船女神丸（二〇トン）が高松沖で米機の機銃掃射をあび死者二〇名、重軽傷者多数を出した。

七月二十二日 島駐屯嵐部隊実地訓練用目標艦芙蓉丸が米機の機銃掃射をうけて死者九名を出した。

八月二日 嵐部隊芙蓉丸が磁気機雷に触れて六名が死亡した。

一、昭和二十二年（一九四七）

一月四日 暴風雨

七月九日 集中豪雨

一、昭和二十三年（一九四八）

十月六日 豪雨

一、昭和二十四年（一九四九）

七月三十日―三十一日 ヘスター台風来襲

一、昭和二十六年（一九五二）

七月二日 ケート台風で集中豪雨

十月十四日 ルース台風来襲

一、昭和二十七年（一九五二）

六月十九日 ダイナ台風来襲

七月三日 集中豪雨 水田冠水、床下浸水、崖崩れ等の被害

七月十日 集中豪雨

一、昭和二十八年（一九五三）

三月二十九日 春雪 麦の被害大

六月七日 台風二号 九月二十六日台風三号来襲

一、昭和二十九年（一九五四）

六月三十日 集中豪雨

七月七日 集中豪雨

八月十八日 台風五号来襲

九月十三日 台風一二号のため南部海岸の被害大 家屋倒壊も多かった。

九月二十五日 台風一五号来襲

一、昭和三十一年（一九五六）

八月 旱魃 水不足に苦しんだ。

一、昭和三十二年（一九五七）

七月十八日午前一時ごろより集中豪雨

十一月 流行性感冒流行 小中学校の臨時休校する所多かった。

一、昭和三十三年（一九五八）

一月二十六日 暴風

八月二十四日―二十五日 台風一四号来襲

一、昭和三十四年（一九五九）

九月二十六日 台風一五号来襲（伊勢湾台風）

一、昭和三十五年（一九六〇）

七月八日 集中豪雨 島内被害は水田冠水二六ヘクタール、山崩れ等。

一、昭和三十六年（一九六一）

九月三日―四日 台風一七号による集中豪雨。九月十六日 台風一八号（第二室戸台風）

十月二十六日―二十七日 集中豪雨 室生峠が埋まり、池田新池、室生大池、新池、吉野賢東池が決壊、

室生豊栄川橋流失。当町内家屋全壊三戸、死者二名、行方不明二名を出した大災害。特に内海町の被害甚大で陸上自衛隊の出動を要請した。



- 一、昭和三十七年（一九六二）  
六月九日―十日、十三日 集中豪雨
- 一、昭和三十八年（一九六三）  
四月―六月 長雨で農作物の被害大
- 一、昭和三十九年（一九六四）  
九月二十四日 台風二〇号来襲
- 一、昭和四十年（一九六五）  
九月十日 台風二三号来襲 瞬間最大風速三九・五メートル、降雨量二〇五・六ミリ。河川の氾濫、田畑冠水、住宅その他大被害、九月十七日 台風二四号来襲
- 二三、二四号台風による当町内の被害左の通り  
家屋全壊 三、半壊 九、床上浸水 一一、床下浸水 三八、一部損壊 九九八戸、道路損壊 九か所、河川 一五か所、漁港 六か所、港湾 四か所、田畑の冠水 四六・二ヘクタール、田畑の流失埋没 六・七ヘクタール等の大被害で、被害総額は一億円を超した。
- 一、昭和四十一年（一九六六）  
二月中旬より集団風邪流行 一時休校の小中校多かった。
- 一、昭和四十二年（一九六七）  
八月 旱魃、湯水 たばこ耕作被害大
- 一、昭和四十四年（一九六九）

七月八日以後四〇日間降雨なく水不足

一、昭和四十五年（一九七〇）

一月 前年に続いて内海町などでは水不足に悩む異常乾燥の季節であったが、時あたかも十二日午後一時五〇分室生字栗木谷より発火、続いて二時二五分、蒲生字山角より燃え始め空前の山林大火となり、ほとんど池田地区全村の山林は十四日まで燃え続けて、ようやく室生方面では午前零時五〇分、蒲生方面では午前一時五〇分鎮火した。焼失面積は室生方面では私有林二六、五二〇ヘクタール、原野及び牧野三、八一五ヘクタール。損害額九、一五〇万円、消防に従った人員一、七〇五人、内自衛隊の出動を要請して二二八人が来島消火に努めた。蒲生方面の焼失面積積町有林九六六ヘクタール、私有林二一、一七九ヘクタール、樹園地、寺敷地五五ヘクタール。損害額三、三三〇万円。消火従事者数一、八九〇人。内自衛隊六四八人であった。当然隣町の土庄、内海両消防団も参加した。まさに未曾有の山火事で、この大火が契機となって三町合同の小豆地区消防組合が四十七年に発足したのである。

また、四十五年十月より着々山火事対策事業が推進されていった。すなわち、

四十五年度

太麻山、栗木谷一帯造林二三・四六ヘクタール、農業用水改良（東蒲生二一八・五、平木一二八・五、石場

二六七、二面二四六メートル）

四十六年度

太麻山、栗木谷一帯造林九・四二ヘクタール、農業用水改良（東蒲生二か所一四二・一三三メートル）

四十七年度

大麻山、栗木谷一帯造林一一・〇七ヘクタール、農業用水改良（石場二二八・八、東蒲生二六メートル）西ノ瀧林道開設三、六二一メートル  
四十八年度

大麻山、栗木谷一帯造林四ヘクタール

一、昭和四十八年（一九七三）

七月十日より九月十日まで降雨少なく渇水。当町では池田、蒲生両地区に対し給水を制限

一、昭和四十九年（一九七四）

七月二日より三十一日まで渇水 池田、蒲生両地区の給水制限

七月六日 台風八号が本島東部地区に集中豪雨をもたらし、隣町内海町の被害は甚大で二九名の死者を出したほどであった。当町は事なく済んだが、当町消防団はその救援に出動した。

一、昭和五十一年（一九七六）

九月八日 台風一七号の接近に伴い薄暮より降雨、大雨洪水注意報が全島に発令され、十日には警報に変わった。雨量は次第に増し、十一日にはついに七九〇ミリにまで達した。当町では同日午後八時より九時までの豪雨はものすごく、家屋、田畑その他の被害は増大した。県警機動隊の来援を要請した。そして十三日ようやく降雨も止み、正午ごろ警報も解除された。しかし、甚大な被害のため当町消防団、各種団体はもとより、県警機動隊、陸上自衛隊（十三日来町）は二十三日まで復興作業にまい進した。被害状況は左記のとおりであった。

一、死者二八名（室生四、南蒲野二四名で特に谷尻地区の惨状は目も当てられない状況で、島内でも当町の死者数は最大であった）

一、重軽傷者二八名（重傷者も室生四名、南蒲野四名）

一、全壊家屋六〇戸（室生、二面、南蒲野が最多数）

一、半壊家屋四二戸

一、床上浸水四六九戸

一、床下浸水一、〇二六戸

一、田畑冠水、流没 一四〇ヘクタール

一、道路損壊一三五か所、河川決壊四八か所、文教施設被害八か所、崖崩れ一九〇か所、溜池決壊（池田大池、

二面大谷池、池田巽池、二面化池、二面山田池、吉野賢東池、吉野新池、蒲野大池）八か所

橋梁損壊（池田千軒橋、八千代橋、迎地橋）

被害総額は四八億八、一〇〇万円の多額であった。そして、これが災害対策事業は毎年施行され五十五年にまで及んだ。ことに、そのため役場部課の建設課を五十二年一月防災建設課に改組し、建設防災工務係、農林防災工務係を設置して現在に至った。

復興事業の主なものを経ると左記のとおりである。

五十二年度 総合防災訓練実施 広報防災無線の設置

赤坂団地、石場団地、池田団地の建設（鉄骨ブロッ

ク又は鉄筋コンクリート）



昭和51年台風17号（谷尻地区）

五十三年度 谷尻団地建設（鉄筋コンクリート） 総合防災訓練実施  
五十四年度 総合防災訓練実施  
五十五年度 総合防災訓練実施

一、昭和五十三年（一九七八）

八月 異常湧水のため上水道給水制限。翌五十四年二月まで湧水対策本部を設置。飲料水を丸亀、坂出両市より給水船により搬入したり、池田水利組合の大池から分水の配分をうけたりした。

一、昭和五十六年（一九八一）

九月 湧水のため湧水対策本部を設置。水利組合の大池より分水をうけた。

翌五十七年五月、ようやく対策本部を解散した。

参考

池田町所蔵文書